113
955

果園雜咏百首

全

大正十五年二月
花房[illegible]次郎氏寄贈

門 イ 18
號 955
番

木乃実といへは人の柿なし橘これらは
らゆゑか中にもおのしおのれおのか名をあらはし
乃味のよしあしみなとめてそ乃趣を
そなへたり縦けりは果のこりあまた春秋
乃花をめてんには言たらおもはしく年ことに作り
果園乃あるしよおのれにまかせ年迄久しく
人なれと小河めしるえきこれらをすゝめて
この一巻をものせよと乞ふに筆をとりて
かいつけ侍るはまことなるもゆるしたまへ
一部しあらくしかへ乃一とし人乃趣をしる

うまくかくたくみなる人まろ赤人の
ひしりを仰き中古にはつらゆき定家
家隆の卿これ等をはしめ多くなれとおほく
えらみあつめありし一書ちなみに由来せる
あつまのみちの大人さる頃桂園のあるしな
よしのふりよそ実景にいとつまひらかにつま
今の代に哥よむといふ人々さ古人のあと
乃ゆくへをしらすしてはあらんといふ口
をしへてさら成る序のちの百首の哥
をえらみあつめりいふへき事をふかしある

ますにつゝるになむありける
明治十一年三月きさらきのはしめ
東久世通禧

果園雜詠百首

春

海邊年内立春

早鞆のめかりのゆふしほ東ふりて春のひかりをみつる哉

立春

花にまつ又かれぬまつさくらはなよりも立て春は来にけり

鶯

奥山のこほる谷まをいつしかと春のうくひすたれかをしへし
うめを折らむ

人よりもさきにまつ梅のはなをみていまさかりなるむかしそ思ふ

雲雀

ひかりの花なるらむと思ふ野のひろきに鳴あがりはる哉

花

大きみのまつりことをまれならしやましくちる桜哉

月前花

うれしや花のかげにいさりまて月吹く跡なるのしらるる

（御しきしまのみちにしもちる桜花かりのこととぞ思ひしらるる）

曙花

ことのさえ及ばぬ空の明かのよそのすゑして思ふ山さくらかな

水上花

池のもの桜うちふくあき風に植なれし花も香にかほる

名所花

大和なる吉野のふもとにかけし白雲は野の中にてみさくらなる哉

馬上花

みかりせしこまのあしとめるうき下川の花にかかりけるかな

夕落花

松の木にもとる鳥のねぐらの夕暮に匂ひをしてもちる山桜かな

夏

野夏草

きりしるる庭に栽ゆる畑の上の末野の草のさかりまさかる

早苗多

大かたのこゝろまちなからうちて思ふしやとしくなれ

川邊螢

河風にかゝとこかれぬきしみの小まつのやみをてらす螢

子規

しての母に似て有るかくら山のなくやこの月に山をたつれ

人傳子規

子規なくなる人はきゝつる人のかたらふ聲をきゝて

子規西方

おもくまくなくや西より東まで不くにも聲するに比にて

五月雨晴

さゝされのさゝふくくれなゐたつしらゝの山に晴ぬる

短夜

一川ぬおきしるやりの文さくもむつまてあまに明なる

瞿麥

肝にしる花瓶のまゝはおほきしやまてにさむるとしる花

泉忘夏

忠うまへあふ成りまたわむまふしまへの涌くりと

海邊納涼

明るきこむこの磯かるのころにさいかる和すに風の涼しさ

夏市

ゑみなから深草のさとにうちなひきてあさ夢すましるの野風

秋

旅泊秋来

浪速風あしまをわけて舟泊すゝしくなりぬ秋やきぬらし

田家早秋

山さとは畑の広けるひきいたてゝくましはふきなるかれ

長門の國黒江の原にて

大海から吹る浪風にかよふなる田のもにおけるあきの初風

七夕

きた風さいのまつ夜の定めの瞳云ひことひの星やおもひきくらむ

野外萩

ゆふしほの夕へのさゝ露野の宮萩さくはなるおもかけもなし

海邊霧

すみこしまつる海の音はかりはつゆかしやまとの浮雲

月

思ふ事なきもとの心すこしてもひくらしまつ秋の夜比哉

停午月

走り出の一もとさくらけしきなしいまゝ中月はなかるゝ

野月

このねまて候云ひめむとろかふ小萩さく野の秋の夜比つゝ

山家月

まれにたに都はいとはし道たえて檜原か奥の秋の夜の月

旅宿月

旅のまろねしきるは旅まもとに草の枕に月みけるなり

寄月述懐

限りなき時てはくにしみそれてこしやましまは秋の夜の月

深夜擣衣

月かけもふけ行里のさよ衣あまりかひてもいそく打なる

秋夕

うらさひしとひの牛のかへるなるや野末の秋の夕くれ

初紅葉

山姫の心ことしもおくらさてまつめつらしき初しほそみせつれ

蔦

結ひてもあかぬ心のまつはれは松にかゝれる蔦のもみち葉

山秋風

夕月夜ほのとの霧にこもれて峰のひとむら秋かせそふく

田秋風

ことしあまる穂はおもやかれてよ山田の刈田に秋風そ吹く

冬

時雨

いさとめすゝ川おとしけはふりまさいはてゆきむらしくれ哉
さむしと枝の枝毎よ井とつれとふりしまゆきふけゆく哉

夜時雨

みなれ棹東そふ吹しねさめのまとさゝれはしくるなる哉

落葉有興

市人のうちやまりの庭をくみ栽木のおちさちりもこ紛れ

寒艸

小沢田の氷のしたをふみこえてさしも川ことあれはありけり

霜

夜あらしふ霜をきそはり尽しほしの光をやゝさむそなりなむ

川千鳥

冬さむき夜ふ川原のくさむらをふきさそはれてなく千鳥哉

初雪

ゆふ霧のおく山さと紀小けせまたもつもそめて雪いふりけり

雪

ちらぬ花つもるは月のこほりしてあはれやかいに雪をめあけたの

風前雪

いかせのあらしさえて大枝の行風をうけにほりゆく雪つみ
ほのめきてはれそうわたる松風に雪の花もつれなくりけり

夜雪

味かりの道ふりぬれはふる世もありけるすの跡夜さの夕せ

屋上雪

くたくるは軒もの丸ね小まの変まやのあまり乃雪のすけく

網代

ひをのしと思ふあしろの布ままにのくちさしあかあれ日

雪中歳暮

のこるらをともまうすさも侘ふるとはとしのくれかな

送年

ふりしける又ことしもとくるとおすての花をかきこまかしあ

冬海

あさふやふれはさえぬとよしやほあつめてよそすらしてのしき波

戀

言出戀

いひそむるむねとしるしは猿の尾をふむしももくるしかりけり

待戀

味のけのしる川を宮ちのねとせふるれにはあるとくさふ色

深夜待戀

そかとて川なれ桃をかりしをけしよしまちとる笑哉

夢中逢戀

うちとけてみせたるおもつまましきふえし我を疑ふれある

逢増恋

一しほの紅のはかりへ人なやましておきところなし

思二世恋

のちの世を迷ふともよりふかくちきりし思ひは此世この世をたのみふ

恋憂喜

なよ待ふ有思ひ行しさも嬉しさもめくる恋しさの絶

恋衣

なかふふ君中と人の甲斐なくてかへる衣を頼めしきぬ

寄鏡恋

思ひ出るにも鏡のうちにうつるみえし人の影をおもひしりける

寄夢恋

あるとふとなくさむるにまはるとも(?)へつゝ恋ふらむ

雑

雲

幻のあとなく空にまよひしはたえぬくもつれて

夕

うちとけて山のはにゆく夕へをいつと相そめつ

水

うきなかしてよこなりし月にすみやふにすめるそのかへ心なからむ

倭人

天地の神もゆるさじ思ふことやくへの心をあすてある

伯諭

身をたつる志もとの下にねむと涼しきいのるおやの子をまもる

猫

おのか尾の釣をとらさと猫のふのたまるゝれは鈎をなくりける

間

まさふ夕やとのなさりてうとうね山をあかなるゝ雪

曲

人心楠のひこ枝のすくにてはとまりゆくよとなりよからまし

安

なさらなく浮世のまゝに思ひすてゝこゝろやすくもなりにけるかな

生

あら川のつひの世まての年月を迎へいたさしゆくいのちなし

蟹の画に

正すなはつる人さるもこもしれ横走りゆく蟹をあはれ也

長恨歌のこゝろを

引こゑを飛鳥の羽としありすへせすする比翼ちなるなれ

菜根譚心無物欲即是秋空霽海といへる心を

晴わたる海のことわりのすかやかなれはたゞこゝろともかり

松岡に住ける人の庭にて道逢して

なえまするのうらみひちあとふえて榛ふの海とそろうよみるは

後藤眞守ふ志めしける

丈夫は取るをうしと風の吹きと絶ゆ阿波ほ叫とやとも吹

立枝子の七年の忌日に

七年のむかし此もの日あくかきてかなおもかるらぬれとれ

海をよろこふ

満てなて千もとをちめるしおすすむろけれ行も如もあれは

思ふこあて

取りとの人の低きなかまとて誠ならぬ人の行やすき

人のつれなりけり何

然り報謝人の世ふのこれかりとも此ぬ人の心やうかり

感思

うれしきまさふへき身をてまつりしに此人のうへさへのまもしかかり

述懐

そしうなる葦辺よりとの家の身も疾くさえよと思ふまゝ行きも

思ふことも実なりいくたひか笑ひ涙しあまりむかしれ久く

海山のあさきるほとききも如ふくえし人の心なりけり

大夫を生なり甲斐なきふ俯して國ふしもとも其名をうれしけれ

丈夫るにあらぬものとめて行時もあはまほしけれ丈夫此ともと

冬述懐

ほあまふ比のあしきこ人やまさにあれにまさ人のよの中

年あけぬらん寄春雨述懐

たかひのまいの鬼大やりこるもし跡るまなれまる

寄國祝

伊多ちとき人にはしおさふひて外國もやまとよろつよ手ならぬ

寄山祝

足引の山いくえてもなひきぬを我か大君は定めうこかし

寄弓祝

ゆつ弓やさしとたゝとの手ひきすゑ代に成のすえとほ矣

早稲田大学図書館
011888007875